
柊と独身男

小豆色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柊と独身男

【Zマーク】

Z6387Z

【作者名】

小豆色

【あらすじ】
喋る柊と、独身男が織りなす不思議なストーリーをお楽しみください

柊が恋した独身男

春、夏、秋、冬。

日本が誇る、美しい四季。

古き時代から親しまれ、愛され続けている四季。
しかし、今の日本人…いや、現代人は
四季を楽しむ気持ちが欠けているのではないだろうか?
かくいう私、牧野息吹もその一人なのだろう。

目の前には、「冬」の名を冠する柊の木が立っている。
その堂々とした、私を通さぬと言わんばかりに
覆い被さろうとする出で立ちは庄巻の一言につくる。
しかし、それ以上の感情は浮かばない。
趣がどうとか、風情がどうとか、私には分からない。
人の言ひ、感情もうすい方だ。そんな私に分かる訳がない。

しかし…。そんな私でもだ。

私でも、今日の柊が落ち着いた、和やかな雰囲気である事が感じ
られた。

なにか、いつもとは違うのではないか…。

そんな考えが頭をよぎる。普段なら笑い飛ばすような話だ。

しかし今は、今だけは信じたくなった。

それほどに、今日のこの柊からはいつもと違う「何か」を感じて
いた。

何故だろうか。こんな事は初めてだった。

知り合いの会社に入社してから早15年。

念願の研究職に就く事ができた。

初めは、研究していられるだけで幸せだった。

夢中で研究を続けていた。仕事仲間とも仲良くなっていた。

そして、いつからか研究主任を任せられていた。

楽しかった。後悔もなかつた。なかつたはずだった。

でも、この木の前にいると、不安になる。

研究職に配属になつた時に貰つたお祝い品の中にこの柊の苗があつた。

正直最初は気が進まなかつたが、育てる事にした。

あつという間に、ぐんぐんと成長し立派な木になつていた。

その堂々とした姿に励まされた事はたくさんあつた。

でも、この木の前に立つと、いつも不安になるのだ。

果たして、自分は正しかつたのだろうか？

それとも、仕事よりも結婚を重視すべきだったのだろうか、と…

この柊は、猛烈に家族というモノを恋しくさせた。

知り合いが少ない訳でない。女友達がいない訳でもない。

むしろ、多い方だろう。これ以上は私自身も望まない。

狭くてもいいから深い付き合いがしたいと思つて いるからだ。

…しかし、そうではないのだ。友と家族は別物だ。

それこそ、月とスッポンよりも。

私の親は私に興味が無かつた。ずっとほつたらかしだつた。

でも、特に不満はなかつた。親への憎しみも、愛しさもなかつた。

あるのは好奇心と研究欲。ひたすら大学を目指しバイトをしてい

た。

そして、高校卒業後は家をでて一人で暮らし始めた。

それからは一度も会う事が無かつた。

昨年、母がガンで倒れた。手術も行つたらしい。

しかし既に末期で、入院から一週間ほどで亡くなつた。

そして、追いかけるように父が自殺をした。

それを聞いても特に何も感じなかつた。

むしろ、葬式代と時間を取られる事に腹が立つたくらいだ。

それでも、そんな家族でも、友とは違うのだ。

別格、とでも言つのだろうか。

かつて、もつと純粹だった子供の頃に愛を感じれなかつた私は、趣味のみに時間を費やした青春時代。寂しくない、といえば嘘になつた。正しかつた、とも思えなかつた。家族、妻、子供。

この年になつて、今頃になつて。重要さに気づいてしまつた。でも、今更どうしろというのだ。生殺しではないか。

「どうかしたんですか？」

考えている途中に飛び込んできた女性の声。りん…と、まるで鈴を彷彿させる澄んだ声。私は驚いた。ここは、私の庭。私が育てた、柊の前。誰かがいる訳が無い。この辺りは田畠しかない。それに、私はこの鈴のような声を聞いた事が無い。

ハツとして柊を見た。確かに、この方向から声が聞こえた。でも、いくら柊が大きいとはいえ、人が隠れるほどの幅はない。では、誰なのか。それは…。

ふつと、ばからしい考えが浮かんだ。
まさかとは思つたが、確かめずにはいられなかつた。

「柊の木…お前が喋つたのか？」

「ええ、そうですよ」

さわ…

まるで頷くかのように木の葉が揺れる。
雪が積もつた田畠を背景に、白い花が開いた柊が揺れる様は
幻想的で奇麗だつた。

しかし、木が喋る様はあまりに変だつた。

「そうか…。お前、喋れたんだな…」

木が喋る。普通な驚くべき所なんだろう。
でも、私は驚かなかつた。

そんな感情よりも、嬉しい…なのだろうか?
愛しさとも言ひべき感情が強かつた。

「ええ。あなたと話す事ができて嬉しいです。
いつもお水や手入れ、ありがとうございます」

柊…声からして女性なのだろうか。彼女が話す「」とに木が揺れる。
まるで、人のように…

「そうか、それはよかつた」

「はい。ところで、一つお話があるんですが…
ちょうど、戯言に付き合つてくれませんか？」

まるで家族と会話しているよつだつた。

もちろん、私の親のよつな、偽りの家族ではない。

心から守りたいと思う、愛したいと思う、本当の家族と。

ただの柊の木。もうそんな風には思えなかつた。

彼女はすでに、私の家族だつた。

しかし、改めて考えるとおかしな話だ。

もしかしたら、幻覚かもしれない。夢かもしれない。

でもそれでも良いと思つ。

39歳にもなつて、愛しい家族を自分から手放そとは思わない。
娘にすら思えるくらいに愛をかけて育てたこの子を、
唯一心を許せると感じたこの子を家族と思わない訳がない。

笑うなら笑えば良い。私は、こればかりは自分勝手にさせてもら
う。

「いいぞ、私でよければいくらでも付き合おつ

「ふふ…。ありがとうございます」

嬉しそうに彼女は笑つた。おもわず私も笑顔になる。
こんな気持ちは初めてだ。楽しい、といつのをひしひしと感じる。

「じゃあ、一つ提案です。

息吹さん、養子を育ててみたらいかがですか？」

それは…。

まるで、わつきの思いを聞いていたかのよつな提案だつた。

しかし、満更でもない気分だつた。

後押ししてくれている気分でさえあつた。

そんな質問をする柊に、そしてそんな気持ちになつていてる自分に
驚いた。

「…なんで、そう思つた？」

動搖が声に出ている。おかしい、普段なら適当に受け流すのに。でも、そんな事よりも彼女の理由が聞きたかった。彼女はそんな私に、まるで諭すように、優しく語りかけた。

「息吹さんが私の前に立つと、何故か寂しそうでした。まるで迷っているかの様でもありました。

私も、そんな息吹さんを見て寂しくなりました」

彼女の声が少しか細くなる。

声に合わせて柊の葉が、落ち込むかのようにすこししなる。そして、その声もだんだんと泣きそつな声になっていく。

「なんで息吹さんは寂しそうなんだろう?

私にできる事は無いんだろうか?

しばりへ、自問自答する日々が続きました

「どうやら、私は知らぬ間に心配をかけていたようだ。申し訳なさと情けなさが胸を締め付ける。

「そんなある日、この家の前をある家族が通ったんです。

とても楽しそうでした。そして、ようやく気がつきました。

ああ、息吹さんは家族が恋しかったんだ…と

「ああ…すべてお見通しつてわけか…」

家族が恋しい。私がここ最近思っていた事だつた。

改めてかなわないなあと感心する。

まるで頼りない父親を諭す聰い娘のようだつた。

私よりも、よっぽど人間らしかつた。

「そのあと、どうすればいいのか再び悩みました。

でも、不思議と結婚という選択肢は浮かびませんでした。

だから、養子を貰えればいいのではと思いついたんです」

「…なんで、結婚が選択肢から外れたんだ？」

一般的な感覚からすると、一番妥当な線ではあるんだが…」

私の質問に、彼女は苦笑いのような声をしながら、照れくさそうに、ちょつぴり恥ずかしそうに答える。

「…嫌だつたんです。大好きな息吹さんが他の人に取られるだなんて」

「それは…」

そこまでに私は好かれていたらしい。

でも、とても嬉しい。心が満たされていくのが分かつた。

「ま、まあ。それは置いておいて。どうですか？養子を貰うのは」

さすがに恥ずかしかつたらしく、あわてて話題を切り替えた。

しかし、先ほどの話を聞いた私にとって、その質問は不要だった。

「君との子供、といつことだらうつ…もちろんいいよ

「わ、わたしの…」

赤面したようにほのかに花が赤くなり、ぶんぶんと枝をふる彼女。その様子が面白くて笑みが止まらない。

「じゃあ、早速貰うとしよう」

「あ、私の子がいいです！」

「そうだなあ。私もそう思つ。名前はどうする？」

「そうですね…。りつか…、うん、六花なんてどうですか?」

雪の結晶の俗称である六花。牧野六花か……。

改めて気づく異常におもわず顔が綻ぶ。

「いいね。じゃあ、牧野六花で」「ふふ、楽しいです」

本当に。彼女と話していると笑みが止まらない。家族とは、こんなにも楽しい物なのだったのか。やつぱり、私は間違っていたようだ。すべてではないにせよ。

口ではやつたもの。

今時、養子を見つけるのは難しい。

この少子高齢化時代に独身男が養子を貰うなんて到底無理な話だ。まあ、それなりにコネもあるから使わせてもらおうか。

とりあえず、一旦離れようとした。
しかし、彼女の様子がおかしかった。

לְעֵמֶק הַיּוֹם וְלִבְנֵי יִהְעָם וְלִבְנֵי יִתְּהָאָמָן

「え、どうした!?」

彼女は急にうめき声を漏らした。声はとても苦しそうだった。何をそんなに急ぐのか、矢継ぎ早に私に語りかかる。

「い、息吹さん、私はもう話せなくなります。

それからは、ただの柊の木に戻ってしまいます。

ですから……、あ、あつつか、ひ…。ビ、ビつか聞こへください」「な、なんだ？」

何が起きているのか分からぬ。これから何が起ころのかも分からぬ。

分かるのは、愛しい家族が消える事。

唯一の、心の底から愛している家族がいなくなつてしまひ事。

ただそれだけだった。

「どうか、幸せになつてください…。つく…た、ただ、私の事、忘れないでくださいね。そんなんだつたら、泣いちゃいますからね」

必死で声を出す彼女の声を聞くと苦しかった。涙が止まらなかった。でも、この子の前では泣けない。

私はもう、父親なのだ。誰がどう思おうとも。せめて、この子の前では立派でありたい。

「私、応援しますから…。ひ、必死に応援しますから…。いつか、再び喋れるまではお別れです。そ、やよつならあ…」

泣き声でそう伝えると、彼女はもう喋れなくなつた。しばらく呆然としていたが、やがて決心し、立ち上がつた。

養子を貰うために。

彼女のための肥料を買つために。

私はこの日決心した。

絶対に、木が喋れるようになる器械を作つてやる。

絶対に、家族を助けてみせる。

初めて私を愛してくれた家族を。

ナムル心の二、おもてうつた。

柊が恋した独身男（後書き）

いかがでしたか？楽しんでいただけたでしょうか。
まだまだ稚拙な文ですが、頑張つて雰囲気を作つてみました。
もし、アドバイス等ありましたら、できれば教えてください。
読んで下さり、ありがとうございました。

舞い散る椿と一人娘

「おとーさん、つばきだよ~」

「椿だな~」

椿が喋つてから早7年、この娘が来てから早2年。私は46歳、六花は6歳になった。娘の成長ほど早く感じる物はない。

最近は「ちょっと前までは…」が口癖になってしまった。

最近の健康診断で知つたが、腰の容態が思わしくないらしい。

改めて老いというのを感じさせられる。

辛いのに抱っこしてしまったのが原因。でも可愛い娘の頼みは断れない。

親馬鹿？褒め言葉です。

多少ガタは来ているけれど、まだまだ元気。六花はもっと元気。

私たちは今、京都に旅行に来ている。

理由は簡単。この前、仕事中にぎっくり腰になってしまったからだ。

もちろん、そんな事では有休は取れない。うちの会社も楽ではないのだ。

でも、この事を心配性の部下達が社長に言つてしまつたらしく。部下達以上に心配性な社長に無理矢理有休を使わされたわけだ。断つひつとしたが、

「そんなんに有休が欲しいなら後でこいつそり追加してやつてもいいんだぞ？」

などとまで言われてしまい。

いやお前、親友相手だからってやばいだろ。

もつと社長らしくしろよとも思つたが、結局流されてしまった。今週は療養旅行をしてこいと、わざわざ予約までされた。さすがに断れなかつたので、春休み中の六花を連れて旅行に来ているといふことだ。

で、今は：

「おとーさんおとーさん！ 黄色の椿もあるよー！」

「おー。すごいなあ。あつちこには桜まで咲いてるぞ？」

「あつ、ほんとーだ！」

深夜にホテル付近の公園で花見中。しかし、本当に奇麗だ。桜の花びらに囲まれた椿達が咲き誇る風景。

生まれ故郷の東北や、今住む北陸には見られない、特有の風景美。決して、有名ではない公園だった。

今来たのも、偶然六花が行つてみたいと言つたからだ。

しかし。いや、だからこそ。そんな公園が凄く輝いて見えた。

都心にしてはそれなりの大きさを持つこの公園。

所狭しに桜や椿が植えられている。

周りは桜で覆われ、中には椿が咲き誇つている。

春の代名詞である桜に、「春」の名を冠する椿が織り成す景色。

私たちは、来たタイミングが良かつたようだ。

ちょうど、桜の花びらが椿にまぶせられるようになつていた。

空を舞う桜の花びらの中で、きらびやかな椿の花がひとときの春を謳歌する。

ライトの光がさしこみ、絵に描いたような風景が一層に引き立つ。計算された、しかし、その中でも自然な輝きを放つ花々。

そして、その中を縫つて歩きまわる六花。

蝶が舞い、桜が舞い、春が訪れる。
椿が咲き、子供が遊び、春が栄える。

これが本当の春なんだと、心から思えた。

本当に、きれいだ…

言葉で表せない、そんな風景。

言葉で表そうとするなど、無粋なまねと言つものだりつ。

ただ、木々の観賞は程々にしておく。

だって、柊に嫉妬されそうだしな。

その柊の話だが。

柊は、あれ以来一切喋つていない。

何度問いかけても、目の前に立つても。

それどころか、徐々に元気がなくなつてきている風にも感じた。

でも、私には何もできない。

今の器械の完成率は、23%ほど。

休日や、暇な時に少しずつ作つている。

でも、喋る為の脳部分や、喋り方が分からぬいため、

コントロール部分やマスター・パーソンが作れない。

周りの翻訳機や外見を作るのが精一杯だつた。

残念ながら、情報が少なすぎる。

せめて、他の木も喋れたら…。何度もそう考えた。

でも、喋つてくれたのは柊だけだつた。

結局、あれからなにも進展していない。

娘が来たら何となるかとも思つたけどそつはならなかつた。

六花が来てからは一人で毎日世話をした。

それでも、柊はなにも話さなかつた。

いや、話せないのだろうか。

私が昇格したときも、養子縁組の目処が立つたときも。

娘が来た時も。娘の誕生日も。娘の入学式の時も。

娘が初めて登校する日も…

へ？娘関連ばっかじゃないかって？
気のせいだよ、うん。

さて、そろそろ六花と遊んでこようかな。
わう思つた時、六花から声をかけてきた。

「おとーさん、ちょっときてー？」

「どうした？転んだのかー？」

「ううん、ちょっとちがうの」

どうしたんだろうか？六花は椿の中心から動かない。
ふと見ると、彼女は一本の椿の前でうずくまっていた。

「あのね、このつばきさんかね。おとーさんとお話ししたいって

は…？椿が、喋つたつてのか…？

いや、まさか、椿みたいな事はさすがに…

「へえ、あなたが息吹さん？」

柊とは違うが、これまた軽快な鈴の音色がした。
活発でボーカルシユな少女を連想させる生き生きとした声。
人間のようで。うれしそうで。楽しげで。
その特徴ある声は、まさしく木の声。

「椿…お前が、喋つたのか？」

「その通り！初めてまして、お一人さん？」

「はじめましてー」

六花は和やかに挨拶をする。さすが私の子。適応力が高い。
…ではなくて！

「柊以外にも喋れたなんて…」

「あれ、知らないの？喋らない木なんてこの世に無いのよ

「…嘘、だろ？？」

衝撃の事実が発覚。喋れるのは柊だけかと思つてたのに…

「いや、本当に。みんな人間なんかと喋る気がないだけで」

「…マジか」

「マジよ」

「おおまじなのー」

はあ…。六花かわいい。って、そうじゃなくて。
しかし、なんでこの椿は話してくれたんだろうか。
六花の人徳つてやつなのか。

桜が舞い散る中で、椿と話をする私たち。
でも、願つても無いチャンスだ。
ぜひ、柊の件の核心に迫りたい。

そうして、なんの考えもなしに話し出した。

「ところで、ちょっと聞きたいんだが…」

「ああ、富山の柊の事？」

「知つているのか？」

「ええ、あの“事件”はあまりにも有名よ。特に、私たちお喋りな
木にとつては」

「口口口口、とまるで転がる鈴のように軽快に話す彼女。知っていたのは予想外だが、その方が好都合だ。…しかし、どうやってここまで伝わっているのだろうか。

もしや、独自のネットワークがあるのかもな。

ふむ…。根から地面を介して伝えるか？

それとも、音のように空気を使っているのか。

それが分かれば、だいぶ器械も作れそうなんだが…

まあ、それは後回しだ。

滅多に無い機会、有効に使わなくては。

「なら3つ、質問していいか？」

知りたいことはそれこそ、山のようであるが。まずは重要な事から。他は後回しだ。

「いいよ。私も、あなたになら話してもいいわ。あはは、あの頑固者ばかりの終が好きになる訳だ。雰囲気が違うもの。暖かい雰囲気だわ、あなた」

「そ、そうか」

そこまで素直に褒められると案外照れるな…。

とても恥ずかしいが、そう言って貰えると嬉しい。

でも、最近自分でも感受性豊かになつてきたとは思つ。嬉しい、とか楽しい、とかを感じるようになつてきた。

「牧野さん、変わりましたね。何があつたんですか？」

最近、そういう風に職場の部下にもよく言われる。

「何でそう思うのか」と訪ねると、

「だつて、最近すゞしく楽しそうですよ～振る舞い方も父親みたいですし」

とまあ、何とも鋭い発言を返される。

養子のことはあまり話すことができないので、苦笑いで凌いでいるが。

：もう、隠しきれないのかもしない。私も年のように。そろそろ、信用できる人達にだけでも話しておこうか。

一人で背負い込むのは辛すぎる。

ついに、そう思つようになつてきた。はあ、前は何とも思わなかつたのに。これも、柊と六花のおかげなのか。

「あはは、おとーさんてるー」

「う、つむれ。やうこいつを叫びさじやない」

ぐつ、む、娘こまで馬鹿にされた。

しかし、私はどうやら感情を表に出しやすくなりし。

長年の親友だけでなく、部下や六花にまで何を思つているのかばれてしまつ。

昔は仮頂面だの冷酷だの言われ放題だつたのに。

：あ、逆か。あの頃は他人に関心がなかつたからか。

そう考へると、なるほど。案外分かりやすい性格なのかもしねない。

い。

「「ホン、本題に入るぞ」

「どうぞ? いくらでも聞くわ

ま、とりあえず聞くだけ聞いてみよ?。

これがなにかのきっかけになれば良いんだが…

「1つ目。木は柊のようになんか喋れなくなるのか?」

「いいえ、違うわ。これまでにも人と話す木はいたけど、彼女みたいのは初めて。

だから、私たちも動搖しているの。おかげでみんな口数が凄く減つたわよ」

「そうなのか…」

とすると、あの事件は木達にとつてもイレギュラーな事態ということ。

これは困った。てっきり木なら解決方法や原因が分かると思っていたんだが。

しかし、なら何故、柊は喋らなくなつたのだろうか。

そもそも何が起きたのだろうか。

…やはり、私が一番の原因みたいだな。

他の木が何かした訳ではないみたいだし、彼女が単に喋らないだけではなさそうだし。

となると、彼女と話した私が一番の原因…。

しかし、私が何をしたというのだ。

彼女と話し、笑い、約束をしただけだ。

それだけでも罪なのだろうか。

考えてもしようがない、か。

なんにしても、私は私の最前を乞うせば良い。

「ということは、他の木…特に他の柊達には影響は無い…と」

「ええ、他の柊達は普通に話しているの。あの後、人と話した勇者だつているけど、

彼女みたいになつたのはいないわ

「おとーさん、なんのはなし?」

「ん、うちの柊の話だよ」

会話についていけず、少し寂しそうな六花に答える。
でも、少しでも良いから理解してほしい。
なぜなら、不安になってきたからだ。

この事件を解決できるのか不安なんだ。
もしかしたら、私だけでは解決できないかもしない。
そうしたら、終はそのまま死んでしまうだろう。
それが嫌だつた。

本当は娘にそんなことを背負わせたくない。
しかし、それは言つていられないのである。

木と喋る」ことができる。

それは、人類だけでなく、六花にひとつでもメリットがある。
特に、今こいつやつて椿と話している彼女には。

「ひいらぎさんもおはなしできたの？」

「そうだ。この椿みたいに」

「そうそう、結構人気だったのよ？彼女」

やはり、木には独自の通信方法があるようだ。
無性に知りたい。私の好奇心が激しくうずく。

未知の事象の事を調べてみたいと思うのは科学者の本能。
体力や知力とは違つて、これだけは決して衰えることは無い。
科学者…特に、マッドサイエンティストなんかがいつになつても
アホみたいに元気なのはそのせいだ。

こればっかりはどうにも抑えることはできない。
自分でも、子供みたいだとは思つただが…

はあ、我慢我慢…。今は柊のことが先だ。

「とりあえず、2つ目。彼女に何があつたのか分かるか？」
「ん~、少しならね？」

よかつた。少しでも良いから彼女の情報が欲しかったのだ。
まさかこんな所で聞けるなんて。棚からぼたもち、いや大金だ。
にしても、六花がここに来たいって言つてくれてよかつた。
彼女の勘が鋭いのか。はたまた、運命という奴なのか。
それとも、椿が六花を呼び寄せたのか…

「彼女が喋らなくなつた理由。それは彼女が“木”でなくなつたからよ」

「木が“木”でなくなる…？」

「そう、私たちはこれを樹化現象と呼ぶわ。木が樹となる…。
まあ私たちのようには話せなくなると考えていい。
ちょっと複雑だから、よく聞いてね？」

すでに頭がパンク気味な六花を心配してか、一旦間を置く椿。
私も心しておこう。ここから先は未知の世界。
誰にも分からぬ事だらけなのだから。

「よし、じゃあいくわよ？」

樹つて言つるのは、いわばさなぎのような状態の木を指すの。
何かに変身する為の休息期間…。彼女はそつなつたと考えられて
いるの。

でも、木が樹になる事は今までなかつたの。
時たま、偶然そういう状態で産まれてくる木がいるだけ
「むう、わからないや…」

本当に頭から湯気を出しながらうとうとうなる六花。

悪いが私でも頭がいつぱいいつぱいだ。

なんとか頭で整理しながら理解しようつと試みる。

「木が樹になるのは分かった。でも、樹は何になるのか？」

「残念ながら、そこまでは分からないの。

樹が産まれる事自体、滅多にないし。私たちにも分からない事だらけ。

おどき詰みたいな物までもひっくり返してみんなで調べているけど、

まだ何にも分かっていないの。「めんね

「あやまらなくていいの〜。…た、たぶん？」

会話に加わりたいが為に必死に話を合わせる六花。

健気だなあ。

しかし、樹化かあ…。といつゝとは、いわゆる羽化的な現象を起しこせば良いのか。

なるほど。大体のイメージはつかめた。

なら、翻訳機じやなくて羽化促進機が必要になるな。

とりあえずの設計図を頭の中で思い描きながら、ダメ元で聞いてみる。

一番聞きたかった、最も重要なこと。

「3つ目。彼女は永遠に樹のままなのか。木に戻ることはないのか

？」

「残念ながら、さすがに分からないわ。

ただ、樹から木に戻ることはなさそうね。一応、進化らしいから。原因解明の為に爺さん達が今頑張っているけど、時間がかかるみたい。

全部分かるまで、だいだいあと3年つてとこね」

「やうか…」

やはりか…。まあ、しょうがないか。
そこまでは期待していなかつたし。
私が頑張れば良いだけの話だ。

「えつと、ひょつといい？」

ふつと、思い立つたように六花が質問をする。
はあ…さつきのを理解できたのか。
我が子の成長にはいつも驚かされる。
…なんて、言つていられなかつた。
六花の質問は、純粹な疑問。

しかも、普通に考えれば当たり前の、単純な質問。

そして。

終のこととで夢中だつた私が失念していた、大事なこと。

「ひじいぢさん、『き』になつてしまへなくなつたんだよね？」

まさかだけど、

あなたまで…、『あ』は…ならない、よ…ね…？

やうやく、さつきも言つたよつて、今回の樹化現象の原因はおひりへ
私。

その私と話した… そうなれば、普通に考えれば。
彼女も、樹になるのではないだろつか?

「……」

「」のタイミングでの彼女の沈黙は、肯定と回じだった。

それを感じ取るや否や。

凄まじい罪悪感、劣等感、自己嫌悪…

あらゆる負の感情が、後悔が、刃となつて私を襲つた。
どうして気付かなかつたのだろうか。

ああ、私はどれだけ犠牲を出せば分かるのだ。
私自身が木にとつては災厄だという事だ。

「つばめ… わん… ピーしたの… え、ほんと… なの?」

六花も椿の異常に気が付いたようだ。

しかし、今の私には何もできない。

「… はあ、残念ながらパンくず。すでにもうだいぶ辛いの
… つーなんじことだ…」

彼女の口から漏れる、考えうる最悪の言葉。

もう、言葉すら出ない。最大級の自己嫌悪にかられる。
そんな私に、椿はやさしく声をかける。

「あはは…。隠れつゝ思つてたんだけど、やけのあがひがひんに気

付かれちゃつた。

おかしいな、隠し通せたと思つたのに。さすが、あなたの子ね。

…ねえ、息吹。そんなに自分を責めないで。いまのは、私から話しかけたの。

いわば、自業自得なの。ねえ、あなたは何も悪くない。本当に、悪くないよ。

だから、そんなに苦しまないで…」

最初こそ明るく振舞っていたものの、すぐにふわりとした優しげな声に変わる。

しかし、私には、柊の声を聞いた私には分かるのだ。

彼女の声が、少し震えている事を。

おそらくは、壮絶な痛みにもがき苦しんでいる事を。

「じめん。…本当に、本当に、申し訳ない…」

もう、止まらない。涙がこみ上げてきていた。

私には止められなかつた。六花の前で、泣き出しちしまつ。しかしもう、体が言つことをきかなかつた。

「ねえ、その手を緩めて。心を落ち着けて、私の話を聞いて？それとも、もう聞いてくれないの？」

手…？意図が分からず、ふと自分の手を見る。

爪が食い込み、血が出ていた。握り締めすぎたようだ。

六花が急いで手当てをしようとしていたが、気にかける暇はなかつた。

「分かつた…。聞くよ。何でも聞く」

「よかつた…、つー、う…」

なんとか悲鳴を抑えようとする彼女。もう見ていられなかつた。

「椿……」

「だ、大丈夫。要点だけ伝えるね。

3年後の夏に、愛媛の榎を訪ねてみて。きっといろんなことが分かると思つ。

あ、もちろん木の方の榎ね。山のほうに、ひとりわ大きな榎があるから。

道はその辺の木に聞い、て……！、うあつ、うつ、はあつ……

ついに堪えきれずに悲鳴を上げる。

椿だから、表情はない。ないが……。

その痛みは、声からでも十分すぎるほどに感じられた。

「あと……つ、できれば私を柊の横に植えてくれないかし、らつ……。ここにいても、もうしようが、ないし……」

「つばきしゃん……うううう」

六花はついに泣き出してしまった。

私も、涙が止まらない。

ああ、人間とは、なんて無力なんだろつか。
目の前で苦しむ者も助けられないなんて……

「この問題が解決できるのは、あなた達一人だあつ、くううー……だ、
だけみ、たい。

がんばつて、ね。応援してよ！じゃ、……頼む、ね。バイバイ！」

最後の力を振り絞り、別れの挨拶を済ませると、沈黙する椿。

その前で泣き続ける私たち親子。

その時、椿の木がわずかに光つたかと思つと、一瞬で一つの花が

実を結んだ。

ふわりふわりと、桜とともに種が虚空を舞つ。
そして、周りの2つの花とともに六花の手に流れかかる。

ぽき…と、枝の折れる音がする。

見ると、一本の枝が根元から落ちてきている。
まるで、自ら命を絶つようだった。

一本の枝が、椿の元に落ちる。

それはまさに、彼女が“樹”となつた証。

私が、木を、またしても傷つけてしまつた証。
涙が止まらない。六花も泣き止まない。

春の早朝。誰もいない公園で、私達は泣き続けた。

どれくらい泣いただらうか。

だいぶ周りが明るくなつてきた頃、六花が話し始めた。

「おとーさん」

意を決するかのような声。

か細い声ではあるが、私には、とても力強く聞こえた。

「わたし、せつたいにつばきさんをたすける。ひいらぎさんもたす
ける。

おとーさんのことも、たすけるからね……」

彼女の決意。小さいながらも、すべてを守りたいある心。

その心に、私は気付かされた。

こうしている場合ではない、と。

六花をぎゅっと抱きしめ、心に誓つ。

私は、柊を。椿を。六花を。
絶対に守つてやると。

死んでも守る、とい。

「よし、そつと決まれば富山に戻るだ。椿を柊の横に埋めてあげな

いと

「へ? う、うん!」

た。

3年後、愛媛を訪れられるよう。
椿の願いをかなえるために。
そして、六花を守るために。

舞い散る椿と一人娘（後書き）

椿が歌う春編です。いかがでしたか？次は夏、榎編です。
しかし、今ときのこ以外の榎なんて知ってる人いるんでしょうか？

まあ、分からなかつたら検索してください。

ここまで読んでください、ありがとうございました。

栄える榎と娘の頑張り

夏。

子供から大人まで、暑さに疲弊させられる季節。

冬と対となり、互いを恋しくさせる季節。

そんな季節に、私は愛媛の榎に呼ばれていた。

しかし、私は今自宅の縁側にたたずんでいる。

横には大きめにカットされたスイカが、目の前には榎と椿がある。椿が榎に寄り添うように生えている。

実は、あの椿は一晩でここまで成長した。

あの後、急いで種と枝を埋めた私たち。

一晩経つて見てみたら、もう椿が大きくなっていたのである。京都で見た大きさと全く一緒だつた。

不思議に思つたが、確かめる方法がなかつたのでそのままである。京都のあの公園の椿が消えたらしいから、おそらくは特殊な移動法だつたんだろう。

まったく、人には到底分からぬことばかりだ。

そうやって、昔を思いつつ、風鈴が鳴る音を聞きながらスイカを食べていたのだ。

冷たいスイカが、風鈴の音が私の体を涼める。

私は、愛媛に行かなければならなかつた。

しかし、どうしても行くことができなかつた。

情けない話だが、この前腰を骨折してしまつた。

重たい器具を運んだ際に、足を滑らせて腰から転倒。

さらにちょうど右の腰の部分にその重たい器具が当たつてしまい。

みごと、骨折になつたという訳だ。全治1か月らしい。

我ながら、何とも情けない話だ。老いを感じさせられる。

でも、悪い事ばかりじやなかつた。

年齢の割に落ち着いている六花の珍しい泣き顔が見れたり。「死なないでお父さん」と、勘違い発言が聞けたり。

部下から社長から会社総出で見舞いにきてくれたり。

堅物で気難しい先輩が一番乗りで病室に飛び込んできてくれた時には

おもわず笑ってしまった。

そして、みんなの愛が感じられた。

ああ、私って愛されていたんだなあ、と。

心の底まで満たされて、温かい気持ちになれた。

しかし、困った。榎に会いにいく約束はどうじょうか。そう思つていたら、六花が提案した。

「わたしが榎さんに会いにいくてくれるよ。お父さんはここでまつて。

大丈夫、心配いらないよ？私に任せて！」

小さく膨らんだ胸を張りぢんと叩いて、まかせろのポーズまでしてくれた。

しかし、六花はまだ9歳だ。一人旅なんてさせられない。

ただ、その他の方法がない。かといって、約束を破る訳にも行かない。

どうしようか…。そう思つて会社の信頼する4人の人に相談した。すると、真っ先に新人の真衣さんが、

「先日完成したAI人形を付き添わせるなんてどうですか？」と、提案してくれた。

AI人形とは、私と真衣さんとその他3人で自主制作しつい最近完成したばかりのアンドロイドの事である。私が設計し、3人が制作し、真衣さんが外見を整える。言葉にすると簡単だが、とても大変だった。

完成間近で爆発したときは本当に挫折しそうになつた。

その分、A.I.人形の性能は折り紙付きだった。

残念ながら感情はついていないものの、日本語と英語を理解し、自主判断能力も備え、人のように動く事ができる。力も強く、ボディガードとしての性能も高い。

近々、特許申請も完了するそうだ。

そのときは、批評家の社長までも

「ノーベル賞も夢じゃないな…」と唸らせるほどである。

ちなみに、気になるその外見なんだが…。

女性陣の意見を反映して、モデルもびっくりの体型となっている。顔は大人びておつとりした感じとなつていて、微笑みが素敵なため感情がなくても十分なくらいだ。制作者の一人の堅物先輩はちょっとと引いてたな。ただ、あの女性陣の勢いに敵うものはいないんだな、これが。しかし、全員日本最高峰の科学者である。

駄作を作る訳がない。

自信はあった。電車経由なら行けるのかもしれない。やくざに絡まれてもボコボコにできるだろう。

でも、それでも気は進まなかつた。

…はあ、六花。無事でいてくれよ。

かわいい子には旅をさせろなんてよく言うもんだ。

本当にかわいい子は手放したくなるはずなのに。

結局他に意見もなかつたので、A.I.人形と六花が行くこととなつた。

まあそういうことで、私は縁側で六花の無事を祈つている訳だ。

頼むぞ、A.I.人形：

…あれ、もうはいってるの？

あー、てすてす。本日は晴天なり。本日は晴天なり。
よし、大丈夫！

ここにちは、六花です。えつと、小学3年生です。
今はお父さんのお使いで愛媛に来ています。

愛媛つて言うのは、たしか、みかんがおいしいんですね。
ただ、今は夏なので…。うーん、残念…。

…みかん、食べたいなあ。

はつ、今のも入っちゃったかな！？

あ、あの、聞かなかつたことにしてくださいね…。

うーんと、あ、今は山の方に向かっています。

椿さんが言つてたので、木に聞いているんですけど。
みなさん、枝で方向を指すだけでしゃべってくれません。
ちょっと寂しいです…。

でも“えーあい”さんがいるので大丈夫です！
お父さんがいなくても、ちゃんとできます。

さて、ついたようです。

一応、バスで来たんですが、平日だからか人がいません。
わたしたちだけみたいですね…。

せみの声がとても大きく聞こえます。

太陽が、木の間から顔を出していて、程よい暑さになつてます。
ちょっと歩くと、とっても大きな木が見えました。
石に囲まれてますね。なんででしょ？

…え、そなんですか？

えーあいさんによると、あれが榎さんらしいです。
榎さん、すゞく、大きいです…。

どのくらいかといふと、学校くらい大きいです。
とりあえず、お話ししてみよ？

「榎さん？聞こえますかー？」

わたしです、牧野六花ですー。お父さんの代わりに来ました！」

「…そうか、そなたが椿の言つていた子か」

ひやつ、びつくりした。

こう、お腹にくるような響きのある声です。
決して大きな声じやないんですが、ふしきどずつしりとした声で
す。

ふしきな声です。

「ふむ…。息吹という者はどうしたのだ？」

「あ、お父さんは腰を骨折しちゃって動けなくなつてます。
だから、わたしが代わりにきました」

まつたく、お父さんも年なんだから氣をつけないといけないよね。
わたしがいないと本当、ダメなんだから。

「ほう、骨折か。それはまた残念な話だ。

まあいい、そなたに話そう。ちゃんと伝えてやつてくれ

「任せてください。大丈夫です」

ちゃんと勉強してきたわたしに死角なんてない！
えつと、聞かないといけない事は… 2つだね。

「じゃあ、質問です。

今回の事件で、分かつてている事を教えてください
「了解した。もうだいぶ分かつてきている。
しつかり聞いているんだぞ？」

「もう、子供扱いしないでよね？
わたしだって、もう小学3年生なんだから。

「今回、柊と椿が樹化した原因は彼女達が人の心を持つたからだ」
「人の心？」

「そう、人の心だ。愛しい、恋しいという思い。

息吹とやらは、これを木に伝えるのが相当上手いようだ。
それを理解した2人は木から樹になった。
それから推測する我らの結論は、

「樹は人に進化する為の段階であつた、ということだ」

えつと、つまり、愛は人間だけの気持ちで、木は普通持つてなくて、
でもお父さんがそれを伝えちゃつたから、樹になった…。

…つてことだよね。

「じゃあ、樹は人になるの？」

「いや、それはない。

樹が人になる事は生物論的にも、現実問題としてもあり得ない

へ？じゃあなんで木は樹になるの？

人になれないのに、人になる為の準備をするなんて。

…え、えっと、”むじゅん”ってやつだよね。

「えっと、おかしくないですか？」

「そう、かなりおかしい。我らだつて疑つた。
まあ、生物とはいつの時代もそんなものだ。
矛盾にまみれているものこそが、生物だからな。
ただ今の場合、木から追放されたと言つたほうが良さそうだがな
人に近くなつたから、貴様らはもう木ではない…。
そう言われている氣もする」

「む、むう」

はあ、もう訳が分かんないよ。

とりあえず、えーあいさんにメモを頼んでおこう。
理解なんてできないよ…。

…よし、次の質問に移ろい。

わたしの得意分野の機械関連！

「次の質問です。

これならわたしにも分かるので、ちょっと張り切っちゃいます。
えっと、この設計図についてなんですけど…」

必要な器械である翻訳機、羽化促進機、そして感情移動機の
三つの設計図の改良点や、アドバイスについての質問です。
とりあえず、今のは翻訳機と羽化促進機は使えないと
分かつちゃつたので感情移動機についてだけ質問しようと思いま
す。

「感情移動機、精神を移動させるための器械の設計図です。
移動した精神はえーあいわんのよつな人形につける予定です。
現状では、これが精一杯です。

樹を人にするのはどうやっても無理なようなのです。
でも、これを作る為の情報が足りないんです。

ちょっと教えてください」

「精神の移動…なるほど、あの男も考えたものだ」

ふふーん。残念ながら、それは違うのです。
わたしだって、遊んでばかりじゃないんです。

細かい所はもうわんお父さんがしたんだけど、アイデアはわたしのもの。

もうお父さんを肩を並べてこないと重つても過重じゃないんですね。

「ぞんねーん。」の器械を考えついたのは、わたしでした~「

「…せう、本当か」

「本当なのです。どうですか? びっくりしたでしょ~」

「はは、本当に驚いた。いやはや、鳶が鷹を産むと言つた良い娘を持ったものだな。ちゃんと親孝行してやるんだぞ?」

「えへへ」

言われなくとも、お父さんはわたしが守つてあげるの。

もちろん、柊さんも椿さんもね。

せんぶわたしに任せなさい。つーことです。

「よし、では手直しだしてやる。まあせーじがいいつだ…」

「あ、ああ~。でもせーじやなこと、いいが動かなくなつちやうか

「…」

その後、榎さんと2人で、設計図の足りないパートを埋めていきました。

日陰でえーあいさんが必死でメモする音が聞こえます。
「ひつひつ…」と、軽快に跳ねるボールペンの音が心地よく、
話もトントン拍子に進みました。

あまりに夢中になっちゃって、お昼を食べ忘れたのは残念でした
けど。

どのくらいじょうか、だいぶ日が落ちてきた頃に、設計図が完
成しました。

「ふ、ふうう。完成です！」

「ふむ、これなら大丈夫だわ！」

わたしが考えた案を、お父さんが設計図にして、榎さんが修正し
た、

精神移動器の設計図。

感情移動機からだいぶ形が変わっちゃったけど、性能も完璧！

…まあ、理論上はそうなんだけどね。

「こればっかりは、やってみないと分からないな。

「…六花さん。最終バスの到着まで、あと20分です」

「え、本当ー？急がないとー！」

「そういえば、もう暗いもんね。お昼も食べてないのに…
いいや、後でえーあいさんになにか貰おう。

「そりが、それなら急がねばな。よし、お前をさうこれをおやつ

「ふえ、なんですか？」

夕日を浴びて赤く染まつた榎がかすかに揺れると、

榎の実が一本の枝ごとがわたしの手に落ちて来た。
あれ、こんな事前にもあったような…

…、！

「え、榎さん！」

「どうした？」

これって椿さんのときと同じ…！
わたしは急いで榎さんの方を見る。
榎さんも、ああなっちゃうの…？

「これ、これって。榎さんも、もう…」

「そうだな、もう」の体はダメだ

「…うひ。ううう…」

あああ。なんで、なんで榎さんまで…
そんなの、そんないや。いや…いやなのに…

「ああ、泣くな泣くな。安心しろ。我は死なん。
お前さんが、それを埋めてくれたらな」

「へ…？」

「何年生きてきたと思つているんだ。対処の方法ぐらい知つていてる。
まあ、とにかくそれを自己に植える。あとはお楽しみだ。
さあさあ、バスに遅れるぞ」

う、うん？どうこうことなんだう？

でも、この様子なら大丈夫なのかな。

いや、大丈夫。わたしが信じてあげないと。
本当の事も嘘になっちゃうよね。

「本当に、大丈夫だよね？」

「もちろんだとも。心配するな」

「…うん、信じる…じゃあね、榎さん。

「えーあいさん、『めんなさい。連れて行つてください』了解しました。しつかり掴まつていてください」

えーあいさんは辞書ぐらいに膨らんだメモ帳をしまつと、ひょいとわたしを背負つて走り出した。

…あんなに話してたんだね、わたし。

後で謝つておかないと。

「榎さん、お元氣で～」

「うむ、お前さんこそな」

榎さんは、満足そうな声で返事をしてくれた。
優しい人だつたなあ、榎さん。

また会いたいな。

でも、さつきのお楽しみつて何だつたんだろう?

ああ、早く帰りたいなあ。

お父さんも喜んでくれるか、な…。

疲れて眠つちゃつたわたしを、

えーあいさんが家まで連れて行つてくれました。

ありがとうね、榎さん。

ありがとうね、榎さん。

栄えん襷と娘の頑張り（後書き）

さて、夏編も終りました。

次は秋編です。

このお話を呼んで、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。
閲覧ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6387z/>

柊と独身男

2011年12月25日17時55分発行